



錦絵 一雄斎國輝画『伊賀越え道中双六・六』  
「沼津驛に平作命を捨て沢井の行方を問糺す圖」

10段からなる「伊賀越え道中双六」は寛永11年(1634)に伊賀国上野の鍵屋の辻で起きた仇討ち事件を題材として脚色され、天明3年(1783)に浄瑠璃として近松半蔵・近松加作の合作により初演されたもので、先行する安永5年(1776)に初演された奈河亀輔の「伊賀越乗掛合羽」を土台にしたものとされています。

仇討ちの発端は、寛永7年(1630)に備中国岡山池田藩城下で起きた藩士渡辺数馬の弟源太夫が、友人の河合又五郎に殺害された事件です。又五郎は江戸に逃れ、旗本に匿われ、数馬は浪人となって、剣の達人であった義兄の荒木又右エ門の助力を得て、居場所を移動する弟の仇の又五郎を追い、遂に伊賀上野の鍵屋の辻で本懐を遂げます。剣豪荒木又右エ門の三十六人切りや曾我物語・忠臣蔵と共に三大仇討ちの一つとして知られています。

六段目の沼津の段は、全体構成から見ると仇討ちの主要人物が登場しない脇筋の世話物ですが、人気が高いため単独でも上演される機会が多かったようです。

この画の場面は、千本松原で先を急ぎ立ち去ろうとする呉服屋重兵衛とそれを引き留め、和田志津馬の妻となっている娘のおよねが盗み取った、仇の沢井股五郎の持ち物の印籠を差し出す平作、それを松の陰から見守るおよねと和田家の家臣池添孫八や地蔵らしい石仏が描かれています。

陰腹を切って、命を懸けてなんとか重兵衛から仇の沢井股五郎の行方を聞き出そうとする平作と、父や妹と気づきながらも、義を重んじてそれを拒む重兵衛の姿が涙を誘うことになります。

重兵衛は独り言として仇の沢井の行方を呟き、陰で聞いていると分かっている二人に知らせて立ち去ります。

市内平町の平作の家の跡になぞられた場所には、何時の頃からか彼を弔う平作地蔵が造立されています。

## 駿河湾の漁

## 川口 洋司さんの漁話

## 仕掛けを使ったハモ（アナゴ）漁 その2

今号は前号に引き続いて仕掛けを使ったハモ（アナゴ）漁のお話です。

ハモ漁の漁場は、千本沖や吉原沖、静浦地区から大瀬崎にかけての沿岸になります（図1）。ハモはあまり深い所にはいないため、岸近くへと仕掛けることとなります。ハモはヌク（泥地）に生息する魚です。狩野川や富士川の河口部は川から流れてくる泥が溜まるため、地質としては最適ですが、真水が強くなるため避けていました。仕掛けを揚げるときにガラガラと当たるようであれば岩場、仕掛けの中に砂が多く含まれていば砂地、泥が多ければヌクと揚げた時に海底の状況を確認して仕掛ける位置を変えていました。

仕掛けを使ったハモ漁は、延縄のように使います。つまり、1本の横に伸びるミチナワ（幹縄）にエダ（枝縄）がたくさんつき、エダの先に仕掛けがつきます（図2）。エダの間隔を詰めすぎると仕掛けを揚げるときの作業が間に合わなくなるため、余裕をもって20尋（約30m）ほどを取ります。2か所に仕掛けることになるため、所有している仕掛けの半分を1本分のミチナワに取りつけることとなります。例えば、100本のモジリを所有していれば、1本のミチナワに50本のエダがつくことになり、ミチナワの長さは約1.5kmの長さとなります。

魚をおびきよせるため、仕掛けの中にイワシを餌として入れていました。アナゴは魚であればどんなものでも食いつくようで、静浦地区で営業していた干物加工業者から廃物として出る魚の臓物をもらって餌として使っても捕ることができました。

夕方ごろになると出漁し、漁場へ向かいます。まず、二組の仕掛けをそれぞれ違う場所に落としていきます。資料館だより234号で取り上げたヨナワ（メカジキの延縄）では一直線に延縄を落としていきましたが、ハモ漁ではカーブさせてみたり、ジグザクにしてみたりと、自分の勘によってハモがいると思ったところへと自由に仕掛けを落としていきます。二組とも仕掛け終わると最初に仕掛けた場所に戻り、一組目の仕掛けを揚げていきます。仕掛けをラインホーラー（巻き上げ機）で揚げつつ、仕掛けの中に入ったものを箱の中にあけていき、再び仕掛けるための餌を仕掛けの中に入れて甲板に積んでいきます。箱にあけた魚の内、アナゴはカメ（魚籠）に入れ、ヌタポー（ヌタウナギ）などの売り物にならない魚は海へと返します。そこの漁獲が良ければそのそばに仕掛け、あまり漁獲が良くなければ別の場所に仕掛けるというように、その時

の状況から判断して仕掛ける場所を決めて再び仕掛けを落としていきます。落とし終わると、二組目を落とした場所に行き、二組目を揚げていきます。揚げ終わると、餌の入れなおしや魚の選別といった作業の後、二組目の仕掛けを落とします。そして、一組目の場所に向かい、一組目を揚げていきます。これを繰り返して、一晩で5カ所ぐらいの場所に仕掛けていきます。

漁が終わると沼津港へ向かいます。沼津港では、ハモの長さによって大まかにハモを仕分けた後に早朝から始まる魚市場で競りにかけられます。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）



図1：ハモ漁の漁場

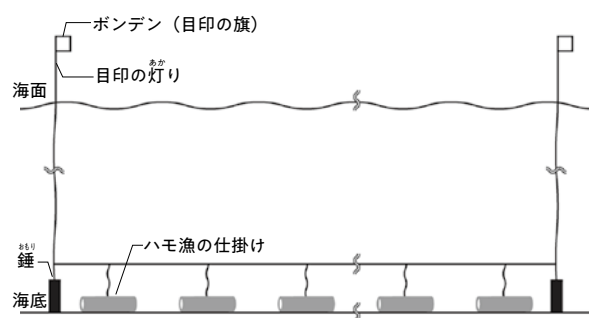


図2：仕掛けを使ったハモ漁の操業図



写真1：市販品のハモ漁の仕掛け

## 『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

## ■香貫・我入道編 その8 香貫郷と内膳堀

昨年10月6日に香貫用水が「世界かんがい施設遺産」に登録が決定した。郷土の誇りでもある「内膳堀」を代表とした灌漑用水路について、引水ならびに排水の役割を少したどってみたい。

●「香貫郷」の地 「香貫郷」は鎌倉期から南北朝期にかけての郷名であり、古文書の「於尺迦堂北僧坊」は靈山寺を指しており、香貫の本村は本郷町付近であろう。南北に双子的な集落が形成され、やがて香貫が上下の2つに分村する。その時期は元禄5年（1692）の複数の絵図に両村名があり、それ以前だが詳しくはわからない。

「香貫二千石」と言われるように、規模の大きな村である。狩野川の洪水被害も頻繁な中で、シルトや粘土などが耕地を覆い、自然の客土がもたらされた。砂礫混じりの土が多く、内山や大洞・天神洞・八重坂の溜め池以外では天水による田地の不利な条件も、植田内膳ほかの先人の苦労が実って豊饒な大地となった。

字内山にある靈山寺（れいざんじ・りょうぜんじ）の背後、香貫山は山頂部が字物見山で、中世の山城（手城山）に関係する。遺構も存在し、展望・視界が開けた地で、中世には鷲頭山頂などとの通信手段から、狼煙台として機能したと見られる。古くは鶏足山と呼ばれ、鶏の足のような山容からと言われてきた。

むしろ宗教的な面で、鶏足山・靈鷲山（れいざん）と見立てていることからか。旧律宗の寺院で、後に曹洞宗に改宗している。寺の南東部背後には「摺り鉢山」と呼ぶ摺り鉢状の峰があり、平安期の経塚がある。香貫山山頂への近道だが傾斜がきつくて危険を伴う。靈山寺の山号にある兜は、背後の摺り鉢山の形状と共通する。

寛政3年（1791）の「靈山寺境内図」では全体が城館の形態を取る中で、「下香貫用水」と記して内膳堀を計画的に配し、寺の総門前の虎口に馬出が作られている。背後はやはり兜の形状の「松山」が、さらに境内の北東には開山堂と伝平重盛の五輪塔が描かれている。

市場町へ連なる特異な直路とは門前で意図的に食違いとなっており、その参道の成立は元禄5年（1692）以前となる。今では暗渠となってしまった「内膳堀」だが、黒瀬道側から靈山寺門前までは水路と道がほぼ沿い、より南側は山裾を離れて整合性がなくなる。

植田内膳（三十郎）と関係の「三十郎新田」は単に新田とも言い、字新田と字寺ノ前の地籍は江戸前期を反映している。寺ノ前・中障子付近は現在の「本郷町」と重なるが、上香貫の元村に当たる。「元組」の核心地と三十郎新田を北部の寺町・門前町として捉えると、南部の住吉・殿ノ前・御所海道は現在の住吉町・南本郷町にほぼ重なり、中世からの開墾地であり、周辺に

かんしが推定される新開の農村的性格で捉えられる。

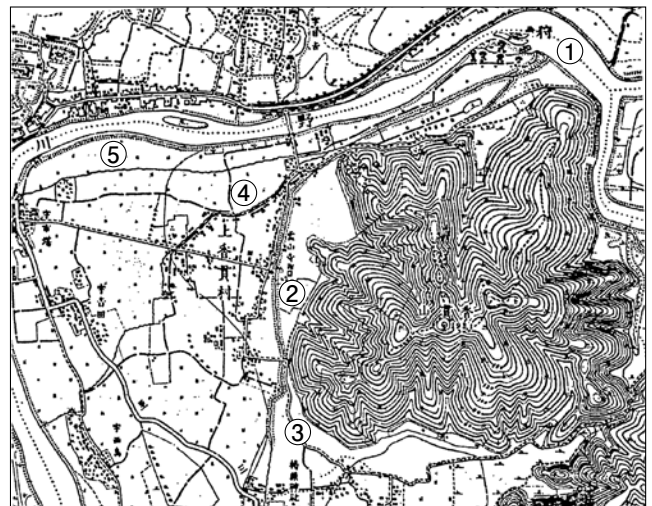
一方「平方」は市場・外吉田・川瀬・西島・榎島などの低平地側で、狩野川左岸の自然堤防等の微高地に集落を形成した中世以降の新開地である。なお字内吉田と字外吉田の関係では、中世に成立をしていた外吉田の集落に対して、字内吉田側は農地が中心であり、中央部に狩野川は当然流れていなかった。

●絵図と寺社 ここで『駿州駿河之郡上香貫村絵図』、文政11年（1828）模写の情報の一部を起こして、以下に記述する。「東は徳倉境の四方沢より西は市場渡しまでにじゅういちちょうあまただ 迄式拾巻町余り、但し山きわ、北は黒瀬渡しより南下香貫境三貫地迄は拾三町余り、沼津町がは之間は狩野川は南に道程けはしく」と村の境界部を記している。

この絵図では寺社の位置が大変詳しく記されている。また家数93戸程を一軒ずつ建物の特徴で丁寧を描き、百姓の名前と持高も書かれている。本絵図では村の中央部、「住吉神社」の存在は不確かだが、字住吉の地に「御蔵」が描かれている。これは村に設けられた年貢米の一時保管用の「郷蔵」の存在を示している。

御朱印高二十巻石三斗余りの寺領を示した、兜率山靈山寺（後の山号は兜率林）には山門と背後に松林を配し、本殿を含めて建物2棟を描く。境内の平重盛の墓と称する巨大な五輪塔の基壇の下から銅製骨蔵器が発掘され、銘文から鎌倉末期の僧、成真大徳を供養したことが判明した。また五輪塔も後期の最盛期の作で、靈山寺住職の成真の遺骨が納められた。

香貫山の西麓、「靈山寺」の門前には北側に「光明院」、南側に「西光院」の塔中（塔頭）のほか、門前には「十王堂」が、上堀寄りに「甲申堂」（後の庚申堂）があり、その北に離れて「山神社」がある。また光明院の北側に神社があり、稲荷社としてもその後南西側の住吉町に移転したかは不祥である。黒瀬道沿いには「浅間社」（後の玉作神社）、字菜園場側には「八幡之宮」（市場八幡）、その門前の字市場には「観音堂」があった。



明治20年地形図 ①大堰 ②靈山寺 ③下堀 ④上堀 ⑤菜園場堀

さらに上流側の上之原近く<sup>うえの はら</sup>の字天神洞には「天神之宮<sup>てんじん の みや</sup>」があった。南側では字二瀬川に「百地藏<sup>ふたせ がわ</sup>」(地藏堂)と「神明之宮」、隣接した字江間田には「矢ハキノ宮<sup>やまき の みや</sup>」(矢作か)が、字槇島には南本郷町の神明宮が後に移転した結果か「神明之宮」がある。字西島には「薬師堂<sup>やくし</sup>」が、字内吉田には「観音堂<sup>くわんおん</sup>」がある。ただし外吉田の「金毘羅神社<sup>こんびら</sup>」はこの頃には勧進されていない。

●新田開発と内膳堀 元禄5年(1692)の図の模写である『駿州駿河之郡上香貫村絵図』には、近世初頭の寛永年間に植田内膳により造られた用水路の通称「内膳堀<sup>うちだんぼり</sup>」を前身とした「香貫用水<sup>かきんすい</sup>」に関連し、凡例の「河井水<sup>かきんすい</sup>」として用水路が三筋描かれている。

また現在、中瀬町の水神社のある堰下公園北側には、狩野川の通称「大堰<sup>おおせき</sup>」の早瀬があり、「大滝堰<sup>おほせき</sup>」とも呼ばれているが、古くに2つの取水路が整備されていたことが絵図から分かる。

「下香貫水門<sup>しもぼり</sup>」からの下堀は字堰下の香貫山の裾を流れ、字二瀬川で下香貫方面<sup>うしおせ</sup>、牛臥方面<sup>おんき</sup>とに分岐する

までを描く。とくに「障子堀川<sup>しょうじぼりがわ</sup>」の水害防止の古い土手のほか、淡島神社前の橋で分岐する様を丁寧に描いている。一方、長さ3間、横9尺の「上香貫水門<sup>かみぼり</sup>」からの上堀は字新田や字住吉付近までを描き、上香貫一円の水田に引いている。また字黒瀬道上から用水路を分岐した、市場八幡側の通称「菜園場堀<sup>さいえんばぼり</sup>」も描いている。

別の文政11年(1828)の絵図では、狩野川へ黄瀬川が合流した字堰下の「大滝」の地をより詳しく描いている。現在黒瀬橋や黒瀬町がある付近は、元々「黒瀬」があったからの命名ではない。渡津部分で「黒瀬の渡し<sup>くろせ</sup>」への道、黒瀬道に由来し、上流側を黒瀬道上、下流側を黒瀬道下(黒瀬町側)と呼んだからである。

近くに「青瀬<sup>あおせ</sup>」があり、より上流側なので、大滝付近が「黒瀬」と推定される。絵図に中州<sup>なかす</sup>が2つ描かれており、遠くから溶岩と見誤った人もいたが、黒色のより重い軽石で、富士山起源のスコリアが再堆積したものである。中州の上手側に石組で築いた取水堰が描かれ、下香貫村と上香貫村両水門が位置している。

## 資料館からのお知らせ

### 歴史講座を開催しました

12月17日に講師として小川雄先生<sup>おがわゆう</sup>をお迎えして市立図書館視聴覚ホールで「水軍から見た戦国期の駿河湾と沼津」と題する本年度の歴史講座を開催しました。

戦国時代に内浦湾から伊豆西海岸にかけての沿岸の海村やその地先の海上では、清水江尻や沼津三枚橋を拠点とする武田水軍や後にそれを取り込んだ徳川水軍に対し、伊豆国を支配する小田原北条氏が重須や長浜城に置いた北条水軍との間で合戦が繰り返り広げられました。

徳川水軍を中心に東国の水軍の研究をされている講師の先生からその研究成果をお話いただきました。



歴史講座の開催状況 (市立図書館視聴覚ホール)

### 移転整備基本構想の策定が始まりました

歴史民俗資料館の旧内浦小学校への移転の第一段階となる移転整備基本構想の策定が始まりました。

歴史民俗資料館は昭和48年度末に建物が竣工し、49年12月に開館しました。既に建物の建築後49年を経過し、海岸に近く塩害を受け易い立地条件もあり、建物や設備の老朽化が進行してきており、抜本的な対策を検討する必要が生じてきていました。

今年度から「沼津市歴史民俗資料館移転整備基本構想策定委員会」を設置し、内浦三津に位置する旧内浦小学校を移転先とする移転整備基本構想の策定に着手しました。

### 沼津市歴史民俗資料館だより

2023.3.25発行 Vol.47 No.4 (通巻237号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:[cul-rekimin@city.numazu.lg.jp](mailto:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp)